東京都写真美術館の事業内容

1. **展覧会事業**
   3階、2階、地下1階に設置する約500㎡の3つの展示室で、年間を通じて展覧会を開催。収蔵している約2万5千点以上の写真・映像作品を中心に紹介する収蔵展・映像展のほか、維持会員の支援を基に実施する自主企画展、他団体との共催展など多種多様な企画を実施する。

2. **教育普及事業**
   講演会やカフェ・トーク、ワークショップ（写真ワークショップ、映像ワークショップ、子どもワークショップ）、スクールプログラム（小学校、中学校、高等学校などとの連携授業）、ガイドツアー、美術館ボランティア事業などを実施する。

3. **作品資料収集**
   収集の基本方針および写真作品収集の新指針に基づき、写真および映像作品・資料、写真機材などを収集、保存、管理。収蔵作品の閲覧サービスを実施する。

4. **調査研究**
   国内外の写真史、映像史、美術史や写真論、映像論、美術論の成果をふまえ、また社会学やメディア論など他分野をクロスオーバーしながら、常に新しい写真・映像作品の動向に目を向け、国際的な視点をふまえた調査研究を行い、その成果を展覧会や普及事業、紀要やシンポジウムなどに反映させる。

5. **広報事業**
   展覧会、写真・映像文化の普及をはじめとした事業に関する広報宣伝（記者懇談会、写真美術館ニュースの発行、チラシ等配布、ホームページ管理・運営、広報イベントの企画・運営、ポスター、外壁ディスプレイシート、懸垂幕の掲出など）。

6. **情報システム**
   収蔵作品および図書資料の収集、登録、管理、運用ができるようデータベースを整備する。情報検索システムを利用し、来館者向け検索サービスを実施する。

7. **保存科学研究室**
   展示および貸出前後における収蔵作品の状態調査、収蔵条件および展示条件の決定、収蔵作品の修復および展示室の環境調査、写真資料の保存・修復に関する研究を行う。

8. **図書室**
   図書資料の収集、整理、保存、閲覧サービス、レファレンスサービス、調査研究の支援を行う。

9. **実験劇場**
   1階ホールで、将来を担う有望な若手新進監督の映画作品や良質な作品の中から、写真美術館にふさわしい映画を先駆けて上映を行う。

10. **維持会員**
    写真・映像に係わる文化や芸術等の振興をはかるとともに、東京都写真美術館の活動を支援することを目的として、法人維持会員制度を設立し、より多彩に充実した事業を展開させる。

東京都写真美術館の戦略的運営

東京都写真美術館のミッション

東京都写真美術館は、平成7年に恵比寿ガーデンプレイス内に総合開館しました。わが国初めての写真と映像に関する総合美術館として開設され、写真・映像の文化の発展を目的に誕生しました。開館10周年を経た今日、当館運営に当たってのミッションは以下のとおり考えます。

平成18年3月2日　　東京都写真美術館館長
福原　義春

**「わが国唯一の写真・映像の総合美術館として、
センター的役割を担う存在感のある美術館を目指します。」**

＜過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館＞
貴重な作品や資料を的確に収集・保存し、将来の写真・映像文化発展の礎とします。また、次世代の文化の担い手である子どもや若者達に積極的に文化発信を行います。

＜質の高い写真・映像文化と出会う美術館＞
社会との関連性や、国際動向を十分踏まえ、収蔵コレクションの有効活用や、調査研究に立脚しながら、質が高く満足度の高い展覧会を実施します。

＜写真・映像文化の普及と新たな創造を支援する美術館＞
美術館での体験を通じ、写真・映像の技法や表現に関する理解を深めるとともに、新たな文化創造を支援する刺激のある場とします。

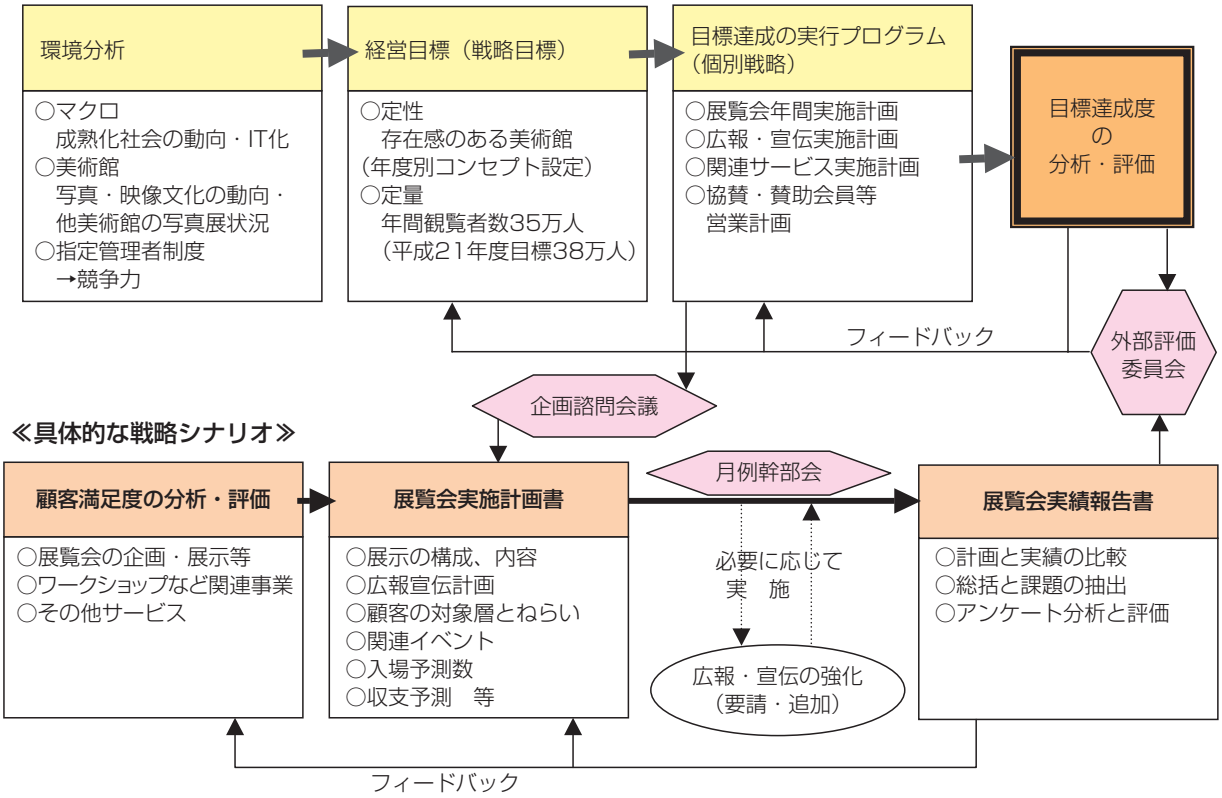
＜写真・映像文化の拠点として貢献する美術館＞
国内外の美術館、関係機関との連携を深めながら、写真・映像文化の拠点として、多様な事業を推進する上で貢献できるよう努めます。

＜開かれた美術館＞
来館者の視点に立ち、人々に広く活用されるとともに、企業、団体、ボランティア等の参画を募り、開かれた美術館とします。

当ミッションは平成18年3月2日に策定した。

写真美術館における戦略的運営システム

写真美術館では、民間企業で取組んでいる戦略的経営の考え方や視点を参考にして運営システムを構築しており、環境分析から戦略目標、個別戦略、事業計画さらには目標管理まで一連の仕組みを定めている。



≪経営目標の設定≫

定　性　目　標　　**「存在感のある」美術館運営**

とりわけ来館者が「また来たい」と思う魅力的な展示と雰囲気を目指す。
○写真愛好家にとどまらず、幅広いジャンル（美術・音楽・映画等）の愛好家が多く来館し、館の存在を一般的に周知できること。
○日本を代表する写真美術館として、写真・映像のセンター的役割を果たすとともに、新しい創造活動の展開の場とすること。

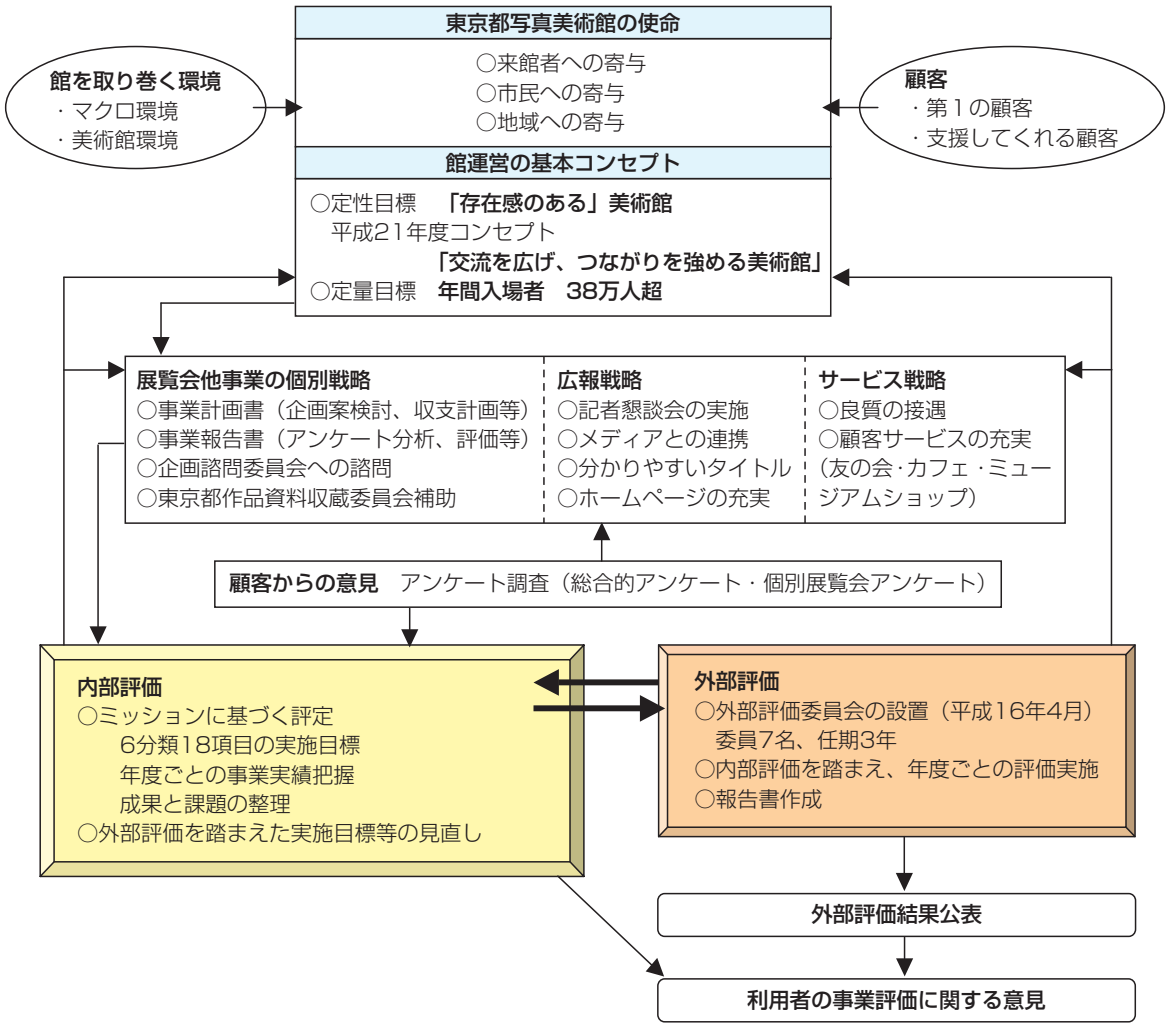
★年度別コンセプト

平成13年度　「静かな賑わい」
平成14年度　「写真（映像）とは何かを伝える」
平成15年度　「感動を与える」
平成16年度　「明るく迎える美術館」
平成17年度　「信頼される美術館」
平成18年度　「判りやすく説明する美術館」
平成19年度　「対話する美術館」
平成20年度　「顔が見える美術館」
平成21年度　「交流を広げ、つながりを強める美術館」

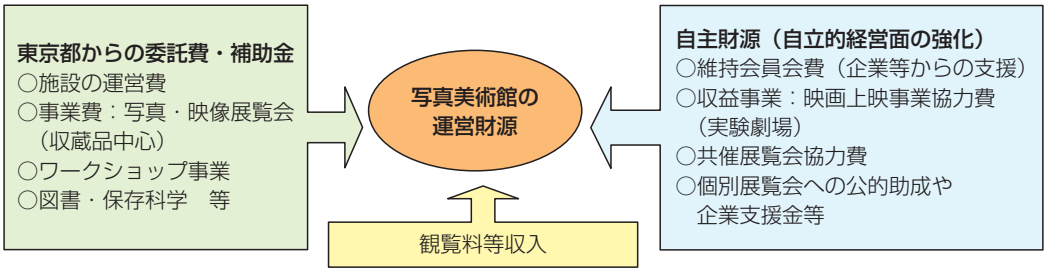
定　量　目　標　　**年間入館者　38万人超**

平成13年度	227,183人（前年度比　1.04倍）	平成18年度	443,107人（前年度比　1.01倍）
平成14年度	364,307人（　〃　1.6倍）	平成19年度	365,871人（　〃　0.83倍）
平成15年度	413,289人（　〃　1.1倍）	平成20年度	415,456人（　〃　1.14倍）
平成16年度	431,521人（　〃　1.04倍）		
平成17年度	441,705人（　〃　1.02倍）	平成21年度	428,514人（前年度比　1.03倍）

館運営と事業評価の概念



運営財源



平成21年度　コンセプトと取り組み

中長期的な目標である「存在感のある美術館」を達成するための活動として、地域連携をさらに深める必要があると考え、平成21年度コンセプトを設定した。

交流を広げ、つながりを強める美術館

～あらゆる機会を捉えて来館者や潜在的な来館者層との交流を広げ、つながりを強めていくことにより、美術館・作品への理解を増やしていくことを目指す～

◆　コミュニティとのつながり強化

近隣小学校体育館の施設を活用

「セバスチャン・サルガド　アフリカ」展の講演会を、近隣の渋谷区立加計塚小学校体育館で開催。

ＪＩＣＡ地球ひろばとの事業連携

「セバスチャン・サルガド　アフリカ」展のレクチャーをＪＩＣＡ地球ひろばの協力で開催。

ロータリークラブとの連携

「セバスチャン・サルガド　アフリカ」展をロータリークラブの協力で地域に働きかけ広報・動員につなげた。

◆　展覧会やワークショップなどを通じた交流機会の充実

恵比寿映像祭での恵比寿ガーデンプレイスとの連携

恵比寿映像祭開催に合わせ、当館が位置する恵比寿ガーデンプレイスとのタイアップキャンペーンを行ったほか、センター広場にLED照明による光と音のインスタレーションを展示。

藤本隆行／真鍋大度／石橋素《Time Lapse Plant／偽加速器 2010（4 Rings)》2010年

海外美術館でワークショップ

国際交流基金の依頼により三影堂撮影芸術センター（北京）、北京日本文化中心に職員を派遣し、驚き盤、フォトグラムのワークショップをおこなった。

展覧会の共同企画及び巡回

「森村泰昌：なにものかへのレクイエム」展　豊田市美術館、広島市現代美術館、兵庫県立美術館との共同企画、巡回。

「セバスチャン・サルガド　アフリカ」展が韓国高陽市アラムヌリ美術館に巡回。

「日本の新進作家展vol.8 出発」がパリ日本文化会館（仏）で同時開催。

「昭和　写真の1945-1989」（2007年度開催）が丸亀市猪熊弦一郎現代美術館に巡回。

◆　作家トーク、学芸員展示解説による鑑賞者との交流機会の充実

学芸員による展示解説（ギャラリートーク）の定着化

毎月第2・4金曜日実施のギャラリートークが定着化し、延べ2,906名が参加した。

展覧会に伴う講演会の充実

作家による対談・講演会・出版社とのコラボレーションによるカフェトークなど、各展覧会に応じた講演会を開催。

延べ3,664名が参加した。

友の会ギャラリートークの実施

「木村伊兵衛とアンリ=カルティエ・ブレッソン」展、「映像をめぐる冒険vol.2　躍動するイメージ」展、「セバスチャン・サルガド　アフリカ」展で友の会会員限定のギャラリートークを実施し学芸員との交流を深めた。

参加者は延べ139名となった。

平成21年度　会議実績

企画諮問会議

座長　高階　秀爾　美術史家／大原美術館館長
副座長　高橋　則英　日本大学芸術学部写真学科教授
飯沢　耕太郎　写真評論家
今橋　映子　東京大学大学院総合文化研究科准教授
柏木　博　武蔵野美術大学教授
重延　浩　テレビマンユニオン代表取締役会長・CEO
菅原　教夫　読売新聞編集委員
中村　政人　東京藝術大学准教授
森　茂雄　日本放送協会（ＮＨＫ）視聴者サービス局長

開催日　平成21年9月9日（水）
議　題　平成20年度の事業実績及び平成21年度の活動方針説明
平成24年度の展覧会企画提案

外部評価委員会

座長　竹内　誠　江戸東京博物館館長　徳川林政史研究所所長
副座長　本多　健一　前東京工芸大学学長、日本学士院会員
岩渕　潤子　慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構（DMC）教授
ピーター・バラカン　ブロードキャスター
稲葉　郁子　朝日新聞社文化事業部
長井　貞明　行政書士
勅使河原　純　JT-ART-OFFICE代表

第1回外部評価委員会
開催日　平成21年6月23日（火）
議　題　外部評価方法の確認及び平成20年度事業実績について報告

第2回外部評価委員会
開催日　平成21年9月29日（火）
議　題　平成20年度事業全部門について総括と最終評定を討議

作品資料収蔵委員会

【収集部会】
委員長　柳本　尚規　東京造形大学造形学部教授
岩本　憲児　早稲田大学文学部教授
香川　檀　武蔵大学人文学部教授
椹木　野衣　多摩美術大学教授
竹内万里子　京都造形芸術大学准教授
港　千尋　多摩美術大学美術学部教授
【評価部会】
石井　孝之　タカ・イシイ・ギャラリー代表
井上　和明　ギャラリーパストレイズオーナー
太田　泰人　神奈川県立近代美術館普及課長
齊藤　洋一　松戸市戸定歴史館学芸員
佐谷　周吾　シュウゴアーツ代表
杉山　悦子　世田谷美術館企画担当課長
増田　玲　東京国立近代美術館主任研究員
光田　由里　渋谷区松濤美術館学芸員

開催日　平成21年11月26日（木）
議　題　平成21年度新規収蔵作品の選定

記者懇談会

第1回記者懇談会
開催日　平成21年5月29日（金）
議　題　平成20年度の事業実績及び平成21年度の活動方針説明

第2回記者懇談会
開催日　平成22年1月29日（金）
議　題　平成20年度事業外部評価の報告
平成21年度及び平成22年度新企画紹介
平成21年度新規収蔵作品の紹介及び実見

平成21年度　トピックス

5月29日　第1回記者懇談会
平成20年度事業実績及び平成21年度活動方針の説明

6月23日　第1回外部評価委員会
外部評価方法の確認及び平成20年度事業実績について報告

7月1日　写真映像文化振興支援協議会理事会及び懇親会
平成20年度の事業実績報告及びギャラリーツアー・懇親会の実施

9月9日　第１回企画諮問会議
平成20年度事業実績及び平成21年度活動方針説明
平成24年度の展覧会企画提案

9月21日　敬老の日　展覧会無料サービス
65歳以上のお客様は展覧会が全て無料となるサービスを実施

9月29日　第2回外部評価委員会
平成20年度事業全部門について総括と最終評定を討議

10月1日　都民の日　展覧会無料サービス
展覧会が全て無料となるサービスを実施

10月30日　9月29日の外部評価委員会にて付議された平成20年度事業外部評価結果を公表

11月26日　作品資料収蔵委員会
平成21年度新規収蔵作品の選定

1月2日～1月4日　お正月特別開館
2日は展覧会無料、3,4日は割引サービスを実施。
この他イベント多数実施

1月21日　総合開館15周年目を迎える

1月29日　第2回記者懇談会
平成20年度事業外部評価の報告、平成21/22年度の新企画及び平成21年度新規収蔵作品の紹介

展覧会事業

展覧会の方針

日本における写真・映像文化のセンター的役割を果たすと共に、国際的な交流の拠点となるべく、コレクションの活用と自主企画・誘致展を組み合わせながら、「質の高い写真・映像文化と出会う美術館」に相応しい展覧会を開催する。

○感動を与える

観覧者に感動を与えるとともに、専門家から一般の鑑賞者まで、満足度の高い展覧会を実施する。

○ミュージアム・コンプレックスの実現

写真美術館の3つの展示室あるいはホールを有効に組み合わせ、いつ誰がきても楽しめる展覧会のラインナップを提供する。

○全てが企画展

固定的な常設展示と異なり、収蔵品を有機的に結びつける収蔵企画展、または独自の切り口による自主企画展等を開催する。

【収蔵・映像展】

世界でも有数の2万5千点以上の写真・映像コレクションを活用し、調査研究に基づいた館独自の視点で展覧会を企画した。珠玉の名作を順次紹介すると共に、展覧会をパッケージ化し、館発の他館への巡回展を行った。

① 写真コレクション展

より多くの作品をより多様なテーマで来館者に鑑賞していただくために、「旅」をテーマに約半年にわたって3部構成で連続展覧会を開催した。図録の代わりとして旅行読売出版社から一般書籍として『旅する写真』を出版した。また、平成19年のコレクション展「昭和　写真の1945-1989」展は「昭和　写真の1945-1989－カメラが捉えた戦後の日本」と題して平成21年10月25日（日）～平成22年1月11日（月）まで丸亀市猪熊弦一郎現代美術館で開催された。

② 新規重点収集作家の展覧会

「日本の代表的作家については重点的に収集し、その作家の創作活動の全体像を表現し得る点数を収集する」という写真作品収集の基本方針に基づき設定された新重点収集作家、北島敬三の個展を開催した。なお、この展覧会等によって、北島敬三氏は第26回東川賞国内作家賞および2010年日本写真協会賞作家賞を受賞した。

また、重点収集作家である木村伊兵衛と、同時代のフランスの写真家アンリ・カルティエ＝ブレッソンを比較考察した「木村伊兵衛とアンリ・カルティエ＝ブレッソン　東洋と西洋のまなざし」展を開催した。

③ 調査研究に基づく独自のテーマの展覧会

新しい試みとして、美術館ではあまり取り上げられてこなかった新聞社のプレス写真に焦点を当てた展覧会「プレス・カメラマン・ストーリー」展を朝日新聞社の協力の下、開催した。

④ 映像展の展開

写真美術館の映像コレクションの５つの指針であるテーマを毎年取り上げるシリーズとして「映像をめぐる冒険」展を平成20年にスタートさせ、第2回として「躍動するイメージ。石田尚志とアブストラクト･アニメーションの源流」展を開催し、映像前史と最新技術を生かした現代の表現を収蔵作品を中心に新たな視点から紹介した。

【自主企画展】

維持会費を中心とした自主財源を効果的に使い、多様な切り口で、話題性のある展覧会を、国際動向もふまえて実施した。また、国内外の美術館等と共同企画し、他館への巡回展を実施した。

① 中堅作家の個展

平成21年に急逝した稲越功一の仕事を検証する「心の眼　稲越功一の写真」展を開催した。図録は一般書籍として求龍堂より出版した。

平成21年度末には今最も旬なアーティストであり新重点収集作家である森村泰昌の新作に焦点を当てた大型展を、2、3階の展示室を使い、「森村泰昌：なにものかへのレクイエム－戦場の頂上の芸術」展として豊田市美術館、広島市現代美術館、兵庫県立美術館と共同企画で開催した。なお、平成20年度自主企画展「やなぎみわ　マイ・グランドマザーズ」展の図録（淡交社刊）に掲載された論文で、当館学芸員・丹羽晴美が2009年美連協カタログ論文賞（自主展部門）優秀論文賞を受賞した。

② 調査研究に基づく独自のテーマの展覧会

他分野と写真の関わりについての調査研究に基づく展覧会として「ジョルジュ・ビゴー展　碧眼の浮世絵師が斬る明治」展を開催した。

③ 国際展

国内外の関係機関とのネットワークを生かした展覧会として、フォト・ドキュメンタリーを代表する作家である「セバスチャン・サルガド　アフリカ　生きとし生けるものの未来へ」展を開催した。この展覧会は韓国高陽市アラムヌリ美術館に巡回した（平成22年1月6日（水）～2月28日（日））。

④ 新進作家展

将来の写真・映像文化を担う新進作家の発掘につとめ、毎年テーマを設定して展覧会を開催し、写真・映像文化の裾野を広げるシリーズ第8回として、旅をテーマに「日本の新進作家　出発－6人のアーティストによる旅」展を開催した。この展覧会は国際交流基金「Voyages-Regards de photographes japonais sur le monde 出発（たびだち）―6人のアーティストによる旅」展として平成21年10月14日（水）～平成22年1月23日（土）までパリ日本文化会館で開催し、その後、ポルトガル、メキシコ等に巡回する予定である。

東京都写真美術館等での長年の写真界への貢献に対して、当館専門調査員の金子隆一に2010年日本写真協会賞学芸賞が授与された。

【誘致展】

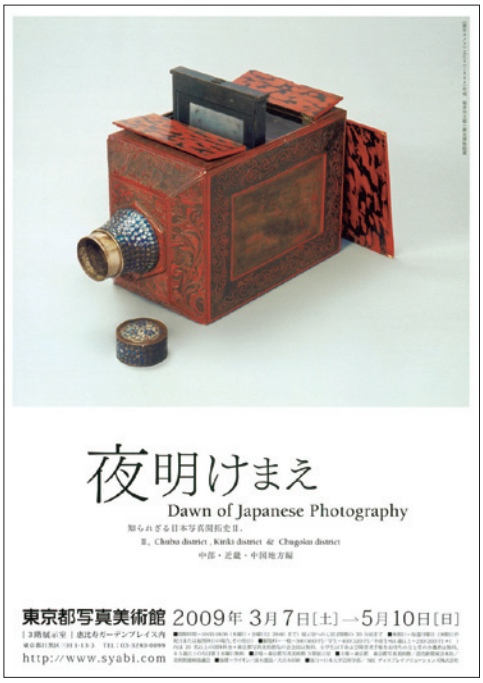
写真月間との共催や、写真団体や企業、新聞社と協力し、外部企画・資金を導入して、展覧会にヴァリエーションをもたらした。

展覧会事業
収蔵・映像展

夜明けまえ
知られざる日本写真開拓史Ⅱ．中部・近畿・中国地方編
Dawn of Japanese Photography [Ⅱ.Chubu,Kansai,Chugoku district]

期　　間 平成21年3月7日（土）～5月10日（日）
36日間（平成21年4月1日以降の開館日数）
主　　催 東京都　東京都写真美術館／読売新聞東京本社／美術館連絡協議会
出品作品数 294点

日本全国の美術館、博物館、資料館等の公共機関が所蔵する幕末～明治中期の写真・資料を調査して、体系化する初めてのシリーズ的試み「日本写真開拓史」の第二弾。写された像だけではなく、装丁や記されている文字など「物」として楽しめる初期写真史の逸品とともに、明治期の写真師を描いた錦絵や『商工名鑑』、そして幕末に制作されたカメラなど、写真初期の歴史を直截感じられる立体的かつ交差融合的な作品・資料が一堂に会した。



プレス・カメラマン・ストーリー
Press Photographers' Story

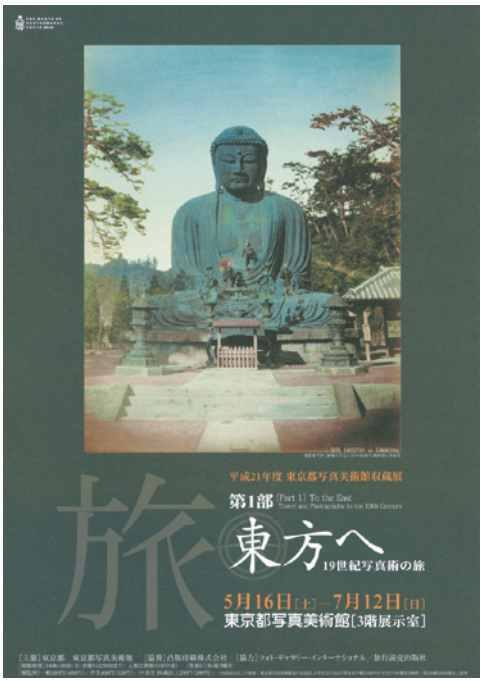
期　　間 平成21年5月16日（土）～7月5日（日）
44日間
主　　催 東京都　東京都写真美術館／朝日新聞社
後　　援 日本新聞博物館
出品作品数 216点

1930年から1970年代前半に、朝日新聞社に在籍したスタッフ・カメラマンたちのなかから際だった活躍をした、影山光洋・大束元・吉岡専造・船山克・秋元啓一らの仕事に焦点を当てた。同時に、朝日新聞所蔵「歴史写真アーカイブ」の通称「富士倉庫資料」と呼ばれる日中戦争の写真と、朝日新聞のデータベースセクションに保管されているベトナム戦争の写真から一部を紹介した。

「旅」
第1部「東方へ　19世紀写真術の旅」
Part 1 “To the East Travel and Photography in the 19th Century”

期　　間 平成21年5月16日（土）～7月12日（日）
50日間
主　　催 東京都　東京都写真美術館
協　　賛 凸版印刷株式会社
協　　力 フォト・ギャラリー・インターナショナル／
旅行読売出版社
出品作品数 180点

本展では写真の黎明期から現代に至るまで「旅」というテーマのなかから生み出された多種多様な表現を持つ作品を、3つのパートに分けて展示を構成した。第1部は「東方へ　19世紀写真術の旅」と題し、幕末から明治半ばにかけて、極東への憧れをもって日本を訪れた外国人旅行者に向けてお土産用に製作された手彩色写真（横浜写真）を中心として展示。併せてヨーロッパから極東へと至る旅行写真の系譜も辿った。西洋で発明され、19世紀という時代の中で東方へと伝播してゆく写真術の旅の軌跡をたどると同時に、写真家にとって、また写真にとって「旅」とは何なのか、を探る展示となった。



「旅」
第2部「異郷へ　写真家たちのセンチメンタル・ジャーニー」
Part 2 “Strange Lands Photographers' Sentimental Journeys”

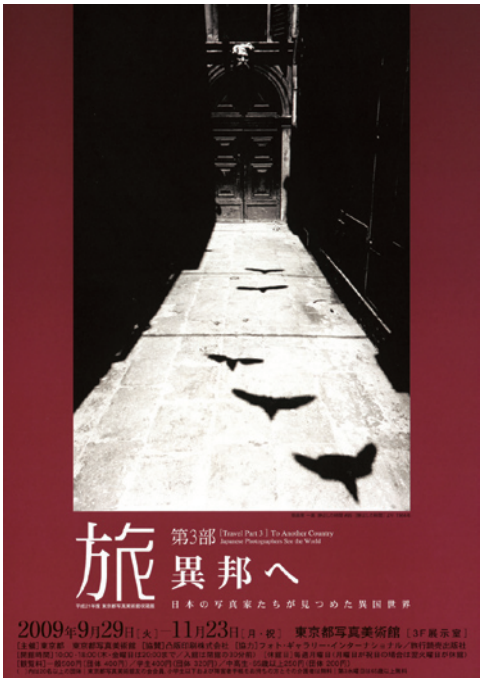
期　　間 平成21年7月18日（土）～9月23日（水・祝）
59日間
主　　催 東京都　東京都写真美術館
協　　賛 凸版印刷株式会社
協　　力 フォト・ギャラリー・インターナショナル／
旅行読売出版社
出品作品数 160点

1970～80年代に発表された戦後世代の日本の写真家たちの作品で構成。日本中を旅しながら、新たな日本の発見と自分自身の作品の模索をしていった9人の写真家（秋山亮二、荒木経惟、北井一夫、須田一政、牛腸茂雄、土田ヒロミ、内藤正敏、森山大道、柳沢信）の作品。そこに写された風景は有名な観光地だけではなく、誰もいかない地方の山奥も、ありきたりな街並みも含まれているが、旅をしながら、当時の社会状況など投影させていった作品を展示した。

「旅」
第3部「異邦へ　日本の写真家たちが見つめた異国世界」
Part 3 “To Another Country: Japanese Photographers See the World”

期　　間 平成21年9月29日（土）～11月23日（月・祝）
49日間
主　　催 東京都　東京都写真美術館
協　　賛 凸版印刷株式会社
協　　力 フォト・ギャラリー・インターナショナル／
旅行読売出版社
出品作品数 165点

海外を旅した日本の写真家たちが見つめた異国世界を展覧した。絵画的表現を目指したピクトリアリズムの幻想的なイメージや、歴史的できごとが刻まれた追憶の場所へのアプローチ等によって、作品に投影された作家たちの多様な想いや感性に触れる機会とした。
出品作家：安本江陽、福原信三、木村伊兵衛、渡辺義雄、桑原甲子雄、名取洋之助、三木淳、林忠彦、奈良原一高、川田喜久治、植田正治、森山大道、小川隆之、深瀬昌久、港千尋、白川義員、並河万里、長野重一



北島敬三1975-1991
コザ／東京／ニューヨーク／東欧／ソ連
KITAJIMA KEIZO 1975-1991 Koza/Tokyo/New York/Eastern Europe/U.S.S.R.

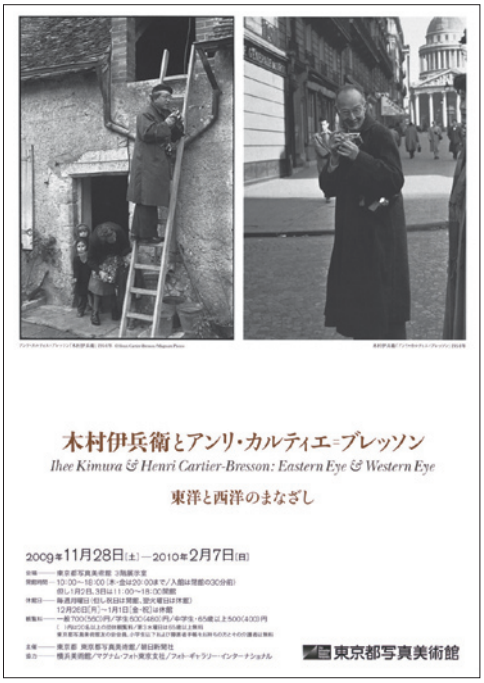
期　　間 平成21年8月29日（土）～10月18日（日）
45日間
主　　催 東京都　東京都写真美術館／産経新聞社
協　　賛 EPSON
後　　援 サンケイスポーツ／夕刊フジ／
フジサンケイビジネスアイ／iza!／
SANKEI EXPRESS
出品作品数 163点

北島敬三（1954-）の前半期の仕事、ストリートスナップに焦点をあて、1975－1991年に撮影された《東京》、《NY》、《U.S.S.R.》の3つのシリーズを軸に、《コザ（沖縄）》、《東欧》シリーズを加え163点で構成した。冷戦時代、西と東の世界に生きる人々の姿を通して、テレビやインターネットにはない想起のメディアとしての写真の力を今一度考える場とした。また、会期中3回の北島敬三連続対論を行った。

木村伊兵衛とアンリ・カルティエ=ブレッソン 東洋と西洋のまなざし
Ihee Kimura & Henri Cartier-Bresson : Eastern Eye & Western Eye

期　　間 平成21年11月28日（土）～平成22年2月7日（日）58日間
主　　催 東京都　東京都写真美術館／朝日新聞社
協　　力 横浜美術館／マグナム・フォト東京支社／フォト・ギャラリー・インターナショナル
出品作品数 153点

ともに近代的写真表現を切り拓いた写真家として重要な存在である木村伊兵衛（1901～1974）とアンリ・カルティエ=ブレッソン（1908～2004）。
本展では、木村伊兵衛とアンリ・カルティエ=ブレッソンという偉大な二人の写真家の個性を堪能するだけではなく、近代的写真表現が絶対的普遍的でありながら、同時にいかに個別的相対的なものであったということを見ようとするものである。木村伊兵衛作品は東京都写真美術館のコレクションを中心に、またアンリ・カルティエ=ブレッソン作品は当館のコレクションを中心に国内各美術館の所蔵作品も含め、153点で構成した。



映像をめぐる冒険vol.2
躍動するイメージ。石田尚志とアブストラクト・アニメーションの源流
Quest for Vision vol.2 : ISHIDA TAKASHI and Genealogy of Abstract Animation

期　　間 平成21年12月22日（火）～平成22年2月7日（日）38日間
主　　催 東京都　東京都写真美術館／産経新聞社
協　　力 ＮＥＣディスプレイソリューションズ株式会社／東京都立多摩図書館
後　　援 サンケイスポーツ／夕刊フジ／フジサンケイビジネスアイ／iza!／SANKEI EXPRESS
協　　賛 凸版印刷株式会社
出品作品数 74点

映像コレクションの基本コンセプトである5つのテーマについて、平成20年度より毎年ひとつずつ取り上げ、収蔵作品を中心に、多彩な特別展示とあわせて構成していくシリーズ［映像をめぐる冒険］。第2回となる本展では、「アニメーション」をテーマに取り上げ、【アニメーションの原理】【抽象アニメーションの源流】【＜特集展示＞石田尚志】の3部で構成した。アニメーションの原理をわかりやすく示しながら、一般にイメージされるキャラクター・アニメ（具象的なキャラクターが登場し、物語を進行するアニメーション）とは違う、もうひとつのアニメーション史を写真、版画、映像装置、資料などによって展覧するとともに、あわせて、気鋭のアーティスト・石田尚志による新旧の作品を、特集展示した。

やなぎみわ　マイ・グランドマザーズ
Yanagi Miwa　My Grandmothers

期　　間 平成21年3月7日（土）～5月10日（日）
36日間（平成21年4月1日以降の開館日数）
主　　催 財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／朝日新聞社
協　　賛 株式会社資生堂／凸版印刷株式会社
協　　力 一色事務所
出品作品数 27点
共 同 企 画 国立国際美術館「婆々娘々」展
平成21年6月20日～9月23日開催

第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館展示で、国際的な注目が集まった、やなぎみわの個展。
京都市立芸術大学大学院美術研究科修了後、1993年に京都で初個展を開催し、以後、国内外の展覧会に多数参加。「少女地獄極楽老女」展（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2004年）、「無垢な老女と無慈悲な少女の信じられない物語」展（原美術館、2005年）、ニューヨーク、ヒューストンなどの個展を経て、さらに活発な制作活動を続けている。
本展覧会では、若い女性が思い描く50年後の自分の姿を作り上げた「マイ・グランドマザーズ」を展示。2000年より発表し続け、老いと生について考察し続けているシリーズを最新作と共に一挙公開した。

ジョルジュ・ビゴー展　碧眼の浮世絵師が斬る明治
Georges Bigot

期　　間 平成21年7月11日（土）～8月23日（日）
38日間
主　　催 財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞
協　　力 ＮＥＣディスプレイソリューションズ株式会社
出品作品数 340点

本展は、ジョルジュ・ビゴーの全生涯に渡る仕事の全貌を見渡す初めての展覧会として、ビゴーが日本へ向かう前の新聞や雑誌への挿絵から、日本で出版した各種画集、そして帰国後の仕事までを網羅するとともに、近年発見されたこの原板も展示。また、幕末や明治初期の風俗、磐梯山の噴火、日清戦争など日本の初期写真の関わりから、風刺画家だけでないビゴーの魅力と、ビゴーを魅了した明治日本の姿を写真と絵画の両面から紹介した。

心の眼－稲越功一の写真
Mind' s Eye : Photographs by Koichi Inakoshi

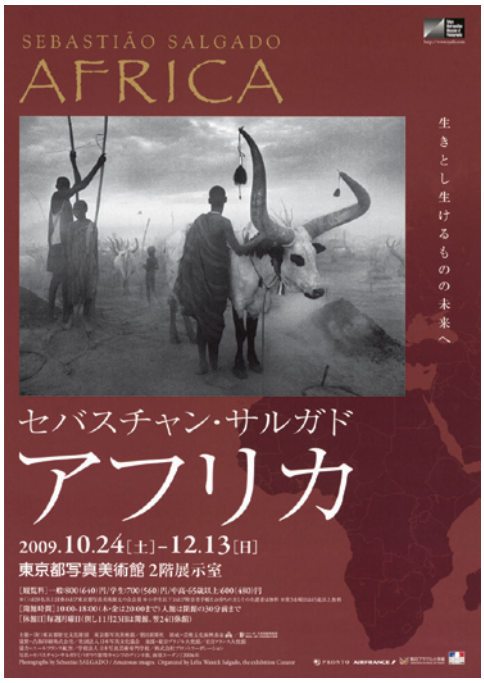
期　　間 平成21年8月20日（土）～10月12日（月・祝）
48日間
主　　催 財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／
東京新聞
協　　力 佐多宗二商店／株式会社資生堂／
株式会社トーキョーグレートビジュアル／
小学館『週刊ポスト』編集部／
望月印刷株式会社／株式会社永昌源
後　　援 キヤノンマーケティングジャパン株式会社
出品作品数 124点

コマーシャル写真家としてスタートし、肖像写真家としても多彩な活躍を果たした稲越功一。本展では、稲越功一の写真世界の原点を検証して、日本におけるスナップショットの表現の系譜を明らかにした。エディトリアルの写真家や肖像写真家として活動を展開するなかで、自分自身のために撮り始め、シリアス・フォトの写真家として注目を集めるきっかけとなった写真集『Maybe,maybe』（1971）や、『meet again』（1973）、『記憶都市』（1987）、『Out of Season』（1996）などの各シリーズ作品とともに、近年のモノクローム作品による「Recent Work」を加え、全124点で構成した。

セバスチャン・サルガド　アフリカ
～生きとし生けるものの未来へ～
Sebastião Salgado　AFRICA

期　　間 平成21年10月24日（土）～12月13日（日）
44日間
主　　催 財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／
朝日新聞社
協　　賛 凸版印刷株式会社／社団法人 日本写真文化協会／
国際ロータリー第2750地区
助　　成 芸術文化振興基金／ポーラ美術振興財団
後　　援 駐日ブラジル大使館／在日フランス大使館
協　　力 エールフランス航空／
学校法人 日本写真芸術専門学校／
株式会社プロントコーポレーション／
ウェスティンホテル東京
出品作品数 100点
巡 回 展 韓国高陽市アラムヌリ美術館　平成22年1月6日～
2月28日開催

フォト・ドキュメンタリーの先駆者であり、今もなお精力的に新作を発表し続けるサルガドの展覧会。当館では2003年に開催した「エッセイ」展以来、2回目の個展。かつて経済学者であった作家の視点を通して記録された作品群の中から、「見捨てられた大陸」「暗黒の大陸」と呼ばれたアフリカの作品を100点選んで展示した。展示作品の中にはサルガドが写真家に転身して初めて取材した1973年から、現在制作中の最新シリーズ「GENESIS（起源）」の2006年の作品までが含まれており、アフリカが抱え続ける問題から自然の豊かな恵みまでを検証することができた。展覧会開催に合わせて来日した作家の講演会には、400名を超える聴講者が募った。



日本の新進作家展vol.8

「出発―６人のアーティストによる旅」

VOYAGES　Views of the world by Japanese photographers

期　　間 平成21年12月19日（土）～平成22年2月7日（日）
40日間
主　　催 財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／
東京新聞
共　　催 国際交流基金
助　　成 財団法人アサヒビール芸術文化財団
後　　援 日本ポルトガル修好通商条約150周年記念・ポルトガル大使館／
社団法人日本ポルトガル協会
協　　賛 凸版印刷株式会社
協　　力 アサヒビール株式会社／EPSON／銀一株式会社／
ハーネミューレファインアート社／
フォト・ギャラリー・インターナショナル
出品作品数 205点

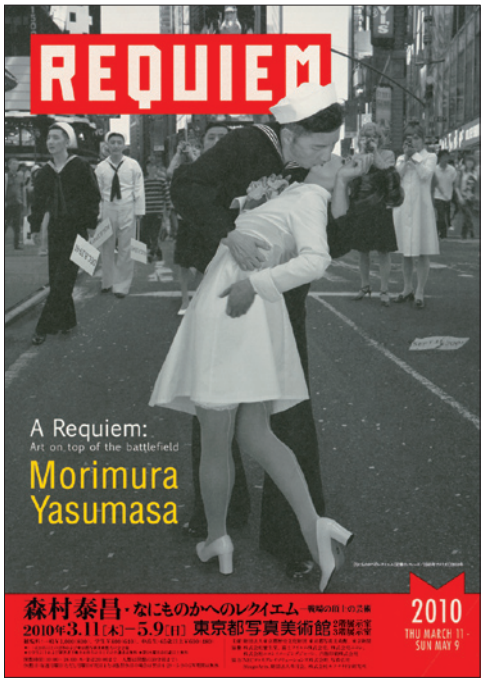
日本の新進作家に焦点を当てたシリーズで、これから活躍が期待される写真家、映像作家（尾仲浩二、百瀬俊哉、石川直樹、百々武、さわひらき、内藤さゆり）の6人による「旅」をテーマにした作品展。彼らのとらえた風景は日本国内から海外、都市から僻地、あるいは現実ではない架空の風景もあり、その表現は千差万別である。6人の作品から、日常生活している場とは異質な空間が世界には存在することを、あらためて認識する展覧会となった。

森村泰昌：なにものかへのレクイエム ―戦場の頂上の芸術

MORIMURA Yasumasa: A Requiem :Art on Top of the Battlefield

期　　間 平成22年3月11日（木）～平成22年5月9日（日）
18日間（平成22年3月31日までの開館日数）
主　　催 財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／
東京新聞
協　　賛 株式会社資生堂／
富士フイルムイメージング株式会社／
株式会社ニコン／
株式会社ニコンイメージングジャパン／
凸版印刷株式会社
協　　力 ＮＥＣディスプレイソリューションズ株式会社／
写真弘社／ShugoArts／財団法人草月会／
株式会社キクチ科学研究所
出品作品数 43点

絵画の登場人物や映画女優などに自らが「なる」変身型セルフポートレイトを手がける美術家・森村泰昌の個展。この展覧会では、報道写真をテーマに20世紀の男たちに扮する新作シリーズ「なにものかへのレクイエム」を完全版で紹介した。三島事件やヴェトナム戦争などを題材に、激動の1960-70年代を彩った男たちを独自の手法で再解釈した2006年発表のシリーズ第一章「烈火の季節」、独裁者、ゲバラ、毛沢東をはじめ20世紀を代表する歴史上の人物を作品化した2007年発表の第二章「荒ぶる神々の黄昏」に加えて、ピカソ、ダリ、ウォーホルといった20世紀の芸術家たちに扮する第三章「創造の劇場」、歴史の分岐点1945年の記憶を未来へ問い直す第四章「1945・戦場の頂上の旗」を新作シリーズとして初公開した。2フロアを使って写真・映像作品43点を展示。



第２回　恵比寿映像祭“歌をさがして”
Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions
2010: Searching Songs

期　　間 平成22年2月19日（金）～2月28日（日）
10日間
主　　催 東京都／東京都写真美術館・東京文化発信プロジェクト室（財団法人東京都歴史文化財団）／日本経済新聞社
共　　催 恵比寿ガーデンプレイス株式会社
後　　援 アメリカ大使館／オーストリア大使館／カナダ大使館／シンガポール共和国大使館／スウェーデン大使館／セルビア共和国大使館／デンマーク大使館／株式会社J-WAVE
協　　力 日本科学未来館／NECディスプレイソリューションズ株式会社／株式会社キクチ科学研究所／カラーキネティクス・ジャパン株式会社／株式会社エディスグローヴ／株式会社サブメディアジャパン／Kyoto DU／株式会社シブヤテレビジョン／ぴあ株式会社／エキサイトイズム／シブヤ経済新聞／株式会社 北山創造研究所／株式会社トリプルセブン・インタラクティブ／株式会社ロボット
出品作品数 展示作品：178点／上映作品：121本

「歌をさがして」を総合テーマに、全館を用い展示、上映、ライヴ・イヴェントなど多彩なプログラムを実施し、多様化する映像表現と、その受け止め方をあらためて問い直した。また、恵比寿ガーデンプレイス・センター広場に大型インスタレーション作品を展示するなど、地域に密着した試みを実現した。

【展示】会場：３階、２階、地下１階展示室ほか
先駆的な作家から、国際的に活躍する実力派、気鋭の若手ら国内外のアーティスト計19組28名が出品。絵画や写真などの静止画像や音響のみで映像体験の多層性を問う大規模インスタレーションを含む様々な表現を配した。

【オフサイト展示】会場：恵比寿ガーデンプレイス・センター広場、渋谷センター街周辺の７ヴィジョン
美術館を飛び出して、公共空間における映像の在り方を探った。

【上映】会場：１階ホール
計16プログラム（47名の作家・監督による計63作品）を上映。あわせて、上映後等に、多彩なゲストを迎えてトークを実施した。

【カフェプロジェクション】会場：２階ロビー
２階エントランスの吹き抜け空間に大型スクリーンを設置し、計58作品を連日上映した。

【ライヴ・イヴェント】会場：地下１階展示室
トーク・セッションやライヴ・パフォーマンス、プレゼンテーションなど計５本を実施した。
【公式ウェブ・サイト】http://www.yebizo.com
本祭告知、アーカイヴ情報公開用のみならず、独自の発信媒体としても機能。各有識者による書き下ろしの論考や対談を掲載。

参加作家・組織等：フィオナ・タン／アンリ・カルティエ=ブレッソン／ティム・リー／ヴィト・アコンチ／ポール・マッカーシー、マイク・ケリー／カタリーナ・ズィディラー／ミン・ウォン／アルフレッド・ジャー／山城知佳子／ジョン・ケージ／ナム・ジュン・パイク／エンネ・ビアマン／ジョナス・メカス／アンダース・エドストローム／タシタ・ディーン／都築響一／高嶺剛／生西康典＋ＡＯ＋さや（テニスコーツ）＋山本精一＋ククナッケ＋小町谷圭ほか多数／藤本隆行・真鍋大度・石橋素（ゲスト：川口隆夫、白井剛、鈴木ユキオ、森川弘和、森裕子、平井優子、古舘健）／シリン・ネシャット／Ｃ・Ｗ・ウィンター＋Ａ・エドストローム／イェスパー・ユスト／パク・チャンキョン／ナターシャ・ニジック／佐々木育野／越田乃梨子／川部良太／J=L ゴダール／坂本龍一＋高谷史郎／DCTV／東京藝術大学大学院映像研究科コンテンツ産業講座／シックスパック・フィルム／リャン・ユエ／ソン・タオ／ヤン・フードン／沖縄県立博物館・美術館／ショートショートフィルムフェスティバル&アジア／シャンアート／角川映画原版保存プロジェクト／ウテ・アウラント／オリボ・バービエリ／フィル・ソロモン／Ｇ・ドイチェ／Ｐ・チェルカススキー／Ｖ・ヴィートリッヒ／ヴァリー・エクスポート／NPO法人映画保存協会／株式会社ＩＭＡＧＩＣＡウェスト／大阪芸術大学玩具映画プロジェクト／川瀬慈／クリス・コニーベアー（ホレホレ節）／ダン・グレアム／ボアダムス／川口潤／相対性理論＋渋谷慶一郎／金沢健一／デイヴィッド・テュードア／牧野貴／タン・フークェン／柳澤田実、大橋完太郎、平倉圭、ドミニク・チェン、樽沼範久／吉増剛造／斉藤洋平、目黒大路、ケンジル・ビエン、多田 汐里ほか多数（順不同）

※本事業は、東京文化発信プロジェクトの一環として開催した。

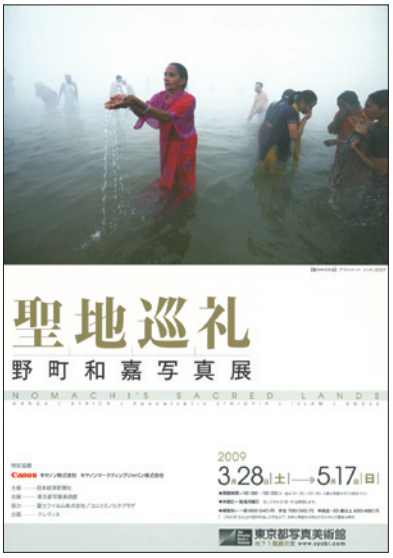
東京文化発信プロジェクトとは
東京文化発信プロジェクトは、東京ならではの芸術文化の創造・発信と、芸術文化を通じた子供たちの育成を目的として、東京都と東京都歴史文化財団が芸術文化団体、アートＮＰＯ等と協力して実施しているプロジェクトです。さまざまな芸術分野のイベントや、まちなかで市民とアーティストが協働するアートプログラム、子供向けの体験型プログラムなどを展開しています。

展覧会事業
誘致展

野町和嘉写真展「聖地巡礼」
NOMACHI'S SACRED LANDS

期　　間　平成21年3月28日（土）～5月17日（日）
42日間（平成21年4月1日以降の開館日数）
主　　催　日本経済新聞社
共　　催　東京都写真美術館
協　　力　富士フイルム株式会社／コニカミノルタプラザ
企　　画　クレヴィス

写真家野町和嘉は20代半ばでサハラ砂漠を訪れ、大地のスケールと、過酷な風土を生きる人々の強靱さに魅せられて、今日までドキュメンタリー写真を撮り続けてきた。35年余に及んだ取材地域は、ナイル川全流域からエチオピア、極限高地チベット、南米アンデスまでをカバーし、過酷な自然と調和しながら受け継がれてきた伝統文化をテーマに、地球規模のスケールで「大地と祈り」を撮り続けている。
本展では、最新作のガンジス、イラン、アンデスを中心として、代表作のアフリカ、エチオピア黙示録、メッカを加えた約150点によって構成された。



日本写真家協会展 第34回写真公募展
2009 THE 34th EXHIBITION OF THE JPS

期　　間　平成21年5月23日（土）～6月7日（日）　14日間
主　　催　社団法人日本写真家協会
共　　催　東京都写真美術館
後　　援　文化庁

1974年に写真文化の振興を目的に、写真愛好家を対象として始まったフォトコンテストの受賞・入選作品展で、今回で34回をむかえる。文部科学大臣賞に比叡　参「祭りの日」、金賞に藤田修一「とんぼり慕情」、銀賞に田中淳市「園外保育の日」、村木捷夫「窓景」、銅賞に亀田満喜代「珈琲でもどうぞ」、楠本富浩「大樹」、宮城隆史「黒い太陽」がそれぞれ受賞した。

世界報道写真展2009
WORLD PRESS PHOTO 2009

期　　間　平成21年6月13日（土）～8月9日（日）　50日間
主　　催　世界報道写真財団／朝日新聞社
共　　催　東京都写真美術館
後　　援　オランダ王国大使館／社団法人日本写真協会／社団法人日本写真家協会
協　　賛　キヤノン株式会社／キヤノンマーケティングジャパン株式会社／ティエヌティエクスプレス株式会社

第52回世界報道写真コンテストは、124ヵ国から5,508人の報道写真家の応募があり、96,268点もの作品が集まった。大賞にはアメリカ人報道写真家アンソニー・スアウの「アメリカの経済危機」が選ばれた。本展では、「スポットニュース」「ニュースの中の人びと」「ポートレート」「スポーツ・フィーチャー」など10の部門から選び抜かれた作品約200点を展示。関連イベントとして、最前線で活躍する若手国際カメラマンによるトークセッション等が行われた。

第20回日本写真作家協会展 第7回日本写真作家協会公募展
The 20th JPA Exhibition 2009

期　　間　平成21年10月17日（土）～11月1日（日）　14日間
主　　催　日本写真作家協会
共　　催　東京都写真美術館

日本写真作家協会の会員が出展する作品と、公募展の入賞・入選作品の二つの作品展示を展示。本年度は会員による作品184点と、全国からの応募作品2147点の中から入賞・入選した158点を加え、全342点を展示。大阪・広島にも巡回した。

写真新世紀東京展2009
New Cosmos of Photography
Tokyo Exhibition 2009

期　　間　平成21年11月7日（土）～11月29日（日）　20日間
主　　催　キヤノン株式会社
共　　催　東京都写真美術館

キヤノン株式会社は、写真表現の可能性に挑戦する新しい写真家の発掘を目的に1991年から公募展「写真新世紀」を行っている。本展では応募人数1,340人のなかから選ばれた優秀賞受賞者5名、佳作受賞者18名の受賞作品を展示した。また同時に前年度グランプリに選ばれた秦雅則による新作作品展を開催した。関連イベントとして11月20日（金）には1階ホールにて「公開審査会」（審査員：荒木経惟、飯沢耕太郎、南條史生、榎本了壱、蜷川実花）を開催した。

第10回上野彦馬賞 九州産業大学フォトコンテスト 開学50周年記念受賞作品展
UENO HIKOMA AWARD Exhibition

期　　間　平成21年12月5日（土）～12月13日（日）　8日間
主　　催　九州産業大学／毎日新聞社
後　　援　東京都写真美術館

わが国の<写真の祖>とも言われる上野彦馬の名を冠したこのコンテストは、明日の写真界へのデビューを夢見る若い写真家の発掘と育成を目的として創設された。プロ・アマを問わず、39歳以下の一般部門と高校生・中学生部門を併設しているのが特徴。第10回目を迎えた今回は総計3,310点の作品が国外を含め全国から集った。本展では、大賞をはじめとする入選作品106点を展示。また、企画展として上野彦馬の作品55点を展示した。

APAアワード2010
第38回社団法人日本広告写真家協会公募展
APA Award 2010／
第1回「全国学校図工・美術写真公募展」

期　　間　平成22年3月6日（土）～3月21日（日）　14日間
主　　催　社団法人日本広告写真家協会／第1回「全国学校図工・美術写真公募展」実行委員会
共　　催　東京都写真美術館／全国造形教育連盟
後　　援　経済産業省／文化庁／文部科学省／東京都教育委員会／財団法人美育文化協会／財団法人 教育美術振興会
協　　賛　オリンパスイメージング株式会社／加賀ハイテック株式会社／コダック事業部／キヤノンマーケティングジャパン株式会社／株式会社玄光社／ソニー株式会社／株式会社電通／凸版印刷株式会社／トヨタ自動車株式会社／株式会社ニコンイメージングジャパン／株式会社日本カメラ社／株式会社日本航空／株式会社博報堂／ピエ株式会社／富士フイルム株式会社／株式会社フレームマン／株式会社堀内カラー／オリンパス株式会社／株式会社キタムラ／キヤノン株式会社／株式会社ニコン／株式会社ビックカメラ／マルコメ株式会社／光村図書出版株式会社／株式会社ヨドバシカメラ／ＨＯＹＡ株式会社ＰＥＮＴＡＸイメージング・システム事業部／ぺんてる株式会社／前田建設工業株式会社
協　　力　法人賛助会員各社
巡　　回　大阪市立美術館　2010年4月6日～4月11日（第1回「全国学校図工・美術写真公募展」は除く）

社団法人広告写真家協会が公募した「APAアワード2010」の入選作品を一同に展示した。
広告写真部門は2008年1月１日から2009年8月31日までの期間に制作発表された印刷物を対象にした作品、公募写真部門では「ひびく（響）」というテーマで応募された、プロ・アマチュアを問わない写真家の新たな表現へ挑戦した作品を選出した。
また、今回は特設展示として「第1回全国学校図工・美術写真公募展」で全国の小・中学生から応募された写真を展示した。

ジャンルー・シーフ写真展
Unseen & Best works

期　　間　平成22年3月27日（土）～5月16日（日）
4日間（平成22年3月31日までの開館日数）
主　　催　産経新聞社
共　　催　東京都写真美術館
後　　援　在日フランス大使館／社団法人日本写真協会／社団法人日本写真家協会／社団法人日本広告写真家協会／サンケイスポーツ／夕刊フジ／フジサンケイビジネスアイ／iza!／SANKEI EXPRESS
協　　賛　株式会社ニコン／株式会社ニコンイメージングジャパン／キヤノンマーケティングジャパン株式会社／ヴィーナスレコード株式会社
協　　力　The Estate of Jeanloup Sieff
企　　画　G.I.P.Tokyo

女性の肉体を表層的、知的な曲線で描き、華麗なモード写真では広角レンズでドラマ性を内に秘め、風景写真においては特有のミステリアスな光景を描き続けてきたジャンルー・シーフ。本展では、写真家でシーフのモデルも務めたバルバラ夫人によって選りすぐられたシーフの未発表作品を初公開。1950年代、21歳の若さで『ELLE』のルポルタージュから出発し、以来、時代が経過しても何ら古臭さを感じない写真を数々残したシーフ。最後まで固有の表現方法、いわば独自のスタイルを貫き通したジャンルー・シーフの世界を示した展示となった。